

谷崎潤一郎

—住居と舞台の「箱」的關係—

武庫川女子大学文学部教授 たつみ 都 志

1. はじめに

谷崎の生涯をたどると、その居住地から関東、阪神間、岡山、京都、熱海と大きく時代区分できる。1886年に生まれ、1965年に亡くなっているが、その79年の生涯の中で42回引っ越している。ざっと計算しても1カ所に1年半しかいない計算になる。作家多しといえども、谷崎ほど転居魔の作家はほかにいない。

なぜ転居をするかという彼は、自分の中で作品を創造するとき、その作品イメージにふさわしい家を探したからだ。例えば『源氏物語』の訳をしているときは、ずらっと部屋が並んだ家に住む。3人目の妻・松子の連れ子の娘や『細雪』にも登場する妹たちに、それぞれに部屋を与える。そしてあたかも光源氏のように彼女たちの部屋を訪れる。まさに光源氏の心境を自分で体感し、そうすることで自分のモチベーションを上げていたのだ。だから1つの作品の構想が出来上がると、引っ越してしまうことになり、結果的に、42回の引越しとなった。

阪神間21年間在住中も13回の転居をするが、これらの「箱」を順番に見ていこう。

2. 阪神間転居の歴史

①苦楽園（大正12年12月～大正13年3月）

谷崎は関東大震災で京都に引っ越す。映画関係の仲間の近くにしばらく滞在するが、京都の寒さに耐えきれず、転居を思い立つ。当時『痴人の愛』を連載していた「朝日新聞」の記者に苦楽園の温泉場を紹介される。当時の苦楽園はラジウム温泉場であった。3軒の大きな旅館があり、その中の万象館という旅館に仮住まいをした。

そこは高台にあり、瀬戸内海の海が見え、天気の良い日は淡路島が見える。風景がよくて魚もおいしく気候も穏やかな土地を、谷崎はとても気に入り、本気で阪神間に引っ越すことを考え始める。

②岡本の借家・その1（大正13年3月～大正15年10月）通称「ナオミの家」

最初に選んだ土地が、現在の阪急岡本のそばである。『痴人の愛』もここで執筆した。

この家は阪神大震災後、長く空き家が續いたが、2007年に解体されることになった。そこで私はこの家を借り受け調査したのち、2006年にこの家の公開を新聞発表した。4月1



1



日、2日のたった2日間だけの公開であったが、なんと全国から約1,400人の谷崎ファンが訪れた。土砂降りの雨にもかかわらず、外で順番待ちをし、ひしめきあいながら交替で家を見物した。この家は、完全な洋室が3つある、当時としては珍しい家であった。詳細は「日本語日本文学論叢」第5号（平成22年3月25日発行）に述懐した。

③岡本の借家・その2（大正15年10月～昭和3年春）

先の家が狭いということで、すぐ上の好文園という、伊藤萬が開発した借家エリアへ行き、2号と4号の家を2つ借りる。谷崎は、母屋という「箱」と書斎という「箱」を常に2つ借りた。居住する空間すなわち日常空間と、書斎という芸術創出空間が別に必要だった。この習慣は生涯変わらない。朝起きると母屋で朝食を食べ、朝9時ぐらいに書斎に「出勤」する。12時には母屋に戻り昼食を食べ、書斎に再び行って2時から4時まで執筆する。そして、4時を過ぎると母屋に戻るといふ、まるでサラリーマンのような生活をしていた。このような生活をするため常に2つの家、「箱」を借りていたのだ。

④岡本で自邸を建築する（昭和3年～昭和6年5月）通称「鎖瀾閣」（さらんかく）

谷崎がある日散歩をして山手の方へ行くと、土地を持った老女が住んでいた。坂道の途中のそこは、大変眺望がよい。谷崎は老女に交渉して部屋をひとつ借りた。部屋からの眺望が素晴らしかったので今度は本気でその地の購入の交渉に入る。円本ブームで、まとまった金を手に入れたばかりの谷崎は懐が温かかった。

この家は、谷崎をめぐる3人の妻が全員出入りしたことになる。まず移住当時は最初の妻・千代がいた。その後、彼女を佐藤春夫に譲る「妻譲渡事件」は有名で、1930（昭和5）年8月19日の新聞に大きく取り上げられた。それをさかのぼること2年前、1928（昭和3）年8月25日、母屋の西側に書斎兼迎賓館としての別邸を建設した。豪邸であった。この別棟は、密かに慕っていた人妻・根津松子を招待するための「箱」、空間だったのである。この別邸の前で、谷崎と妻・千代、松子夫妻、小出権重たちが並んだ集合写真がある。

千代を佐藤に譲ったあと谷崎は、この家に女子専門学校時代から出入りしていた古川丁未子と電撃結婚。1931（昭和6）年3月に室内に仲良く並んだ写真が残っている。円本ブームのあと、調子に乗って「谷崎潤一郎集」を出版するなどしたが、これが思惑違いで多額の借金を抱えることになる。そのためせっかく作った豪邸を手放すことになるのだ。

この家は1931（昭和6）年12月11日の号外にあるように、文箭郡次郎氏が買い、その子孫が谷崎から譲られた当時のまま保存に努めていた。しかし1995（平成7）年1月17日阪神大震災後で全壊したのである。われわれは復元運動に際してこの家を、谷崎の掌編小説『鶴唳（かくれい）』にちなんで「鎖瀾閣（さらんかく）」と名づけた。

⑤東大阪（当時中河内郡孔舎衛村根津商店寮）の仮住まい（昭和6年9月～11月）

⑥夙川の根津別荘別邸（昭和6年11月～昭和7年2月）

1927（昭和 2）年芥川龍之介の講演が縁で根津松子という人妻と知り合った谷崎は密かに彼女への慕情を募らせていた。2 番目の妻・丁未子との結婚はそのせいで破局を迎えることになるのだが、そのきっかけは、松子との夙川隣居だった。

そもそも谷崎は④の家を売りに出すや、新妻・丁未子と高野山にこもっていたが、借金を支払うために売却したあと、夙川に借家住まいすることにする。これは根津家が持っている別荘で、松子の提案だった。隣り合わせに住むことで、谷崎と松子の 2 人は急速接近し、新婚の丁未子の立場は微妙なものとなった。しかしこの 2 軒の家も根津家の経済状態の悪化により出ることになる。

⑦⑧間借りと隣居（昭和 7 年 2 月～12 月）

根津家を追って間借りした谷崎は、根津家の隣が空くのを待って隣家に移った。灘高のそばのここには今は何も残っていない。

⑨⑩隠れ家（昭和 7 年 12 月～昭和 9 年 3 月）

根津家と隣居していた借家を出たあと、谷崎は丁未子とともに井谷家の貸家に移った。もはや冷えた夫婦関係を修復する気もなく、丁未子を近所の妹尾家に預け、1 人密かに松子の来訪を待っていた。しかし丁未子が時折帰るのを厭い、⑩に移り住んだ。⑨は現・東灘区本山北町 5 丁目に今も残っているが、すでに住む人もなく廃墟同然である。

⑪芦屋（昭和 9 年 3 月～11 年 11 月）

1934（昭和 9）年 4 月 25 日松子は離婚届けを出し、芦屋の家で谷崎と同棲生活を始めた。しかし 1935（昭和 10）年 1 月 26 日正式に結婚するや、谷崎は松子の妹たちを引き取ったため、この借家が手狭になって引越しをする。これが倚松庵である。

⑫倚松庵（昭和 11 年 11 月～18 年 11 月）

この家で谷崎は『潤一郎訳 源氏物語』を書き上げた。その後家主と書齋をめぐっていざこざがあり、1943（昭和 18）年 11 月、13 番の川向いの家に引っ越した。しかし、この川向かいの家は谷崎が岡山に疎開中、空襲で全焼してしまう。

このように、谷崎は阪神間を 13 回転居している。また、借りるなり建てるなりしないまでも、作品にふさわしい部屋を間借りして執筆することもあった。

3. 阪神間の 3 つの家（「箱」）についての言及

① 倚松庵

倚松庵にいくと『細雪』の場面描写の謎がすべてわかる。

『細雪』を読んでいると途中不可解な描写がある。例えば中巻で末っ子の妙子が踊りの着物に着替えているときに、カメラマンの板倉が下から階段を上って来る場面がある。

「写真屋さん、——」

と、悦子は、階段の中途に立ちながら二階の廊下に首だけだして妙子の姿を覗き込んでいる二七八の青年に云った。(中巻3章)

「二階の廊下に首だけだして」という表現の理解に苦しんだ。しかし倚松庵に行くと、手すりのところに柵があり、そこから顔が出せるようになっていることがわかる。『細雪』は4人の姉妹の話だが、倚松庵という建物自体も登場人物に負けず劣らず非常に重要なのである。



図1 倚松庵1階間取り図



図2 倚松庵1階間取り図

谷崎の作品には「場」の持つ意味が重い。1階の応接間は「公的」空間。姉妹たちはここに集い、雪子の見合い話をはじめ、さまざまな日常会話をする。中巻の冒頭部には、妙子の山村流の踊りの会が描かれる。応接間と食堂の三枚扉が取り払われ、金屏風を背景に妙子が踊りを披露。家族や踊りの師匠や、隣家のドイツ人の家族が集う。

食堂の西には、「六畳の日本間」(実際には4.5畳)は「南側が庭に面してはいるけれど、庇が深くて薄暗い行燈部屋のような所なのであるが」と描写され、夏の暑い日には「三人は争って」「冷え冷えした窓」の前で「畳に寝そべるように」している場所である。(中巻

11章) また貞之助がある日外出から帰ると「雪子が縁側に立て膝をして、妙子に足の爪を切ってもらっていた」(中巻 29 章)とあり、下巻ではその部屋の押し入れで愛猫が出産する場面もある。つまりこの部屋には、谷崎らしい秘密めいた甘美にして淫靡なイメージを与えられている。1階の浴槽もしかり。風呂のくぐり戸が開いていて、「湯に漬かって妙子の肩から上の姿が隙間からちらちら見える」ため、幸子が女中のお春どんに閉めるよう指示すると「うち、ラジヲ聴くのでわざと開けとくねん」と答えるシーンがある。このことをきっかけに幸子は末妹・妙子の品格が落ちたことを実感するのだが、これは板倉というカメラマンと付き合いだしたせいではないか、と思うのである。このように、各部屋でのさまざまなエピソードが語られ、それらが巧妙に姉妹を取り巻く物語に有効にかかわってくるのである。

初めて倚松庵の内部に足を踏み入れたのは、1984(昭和 59)年だったろうか。作品との密接な関係に鳥肌がたった。しかし、1985年、住吉川西岸の上に六甲ライナーができることになり、西岸の家はセットバックするか、もしくは立ち退いてもらいたい、との要望が神戸市から言い渡された。住民はこぞって反対運動をした。その反対運動の目玉として、倚松庵が担ぎだされた。しかし運動は結実せず、結果的に六甲ライナーは通ることになった。1986年1月16日、「どうしても倚松庵だけは残してほしい」と神戸市当局に提案したところ、ようやく北へ200メートル移築する措置が採択されたのである¹⁾。そして、倚松庵は3年後1990(平成2)年、現在の位置によみがえった。この移築が倚松庵を不屈のものにした。移築した時に耐震構造にしたため、1997年の阪神大震災に耐えたのだ。運の強い家である。あとで語る「鎖瀾閣」の運と対照的であった。

② ナオミの家

2006年に「ナオミの家」と命名した家は、谷崎研究家の間では「北畑の家」と通称されていた家である。1924(大正13)年3月～1926(大正15)年10月まで谷崎潤一郎は、この地で2軒の借家を借りて住んでいた。通りに面した家を母屋とし、通路を入った突き当たりの家を書斎に使っていて、ここで『痴人の愛』が書かれた。

以下は『痴人の愛』の中の描写である。

マッチの箱のやうに白い壁で包んだ外側。ところどころに切つてある長方形のガラス窓。そして正面のポーチの前に、庭といふよりは寧ろちょっとした空地がある。

<A>

『痴人の愛』は朝日新聞に連載されたのだが、挿絵を担当したのは、歌舞伎の舞台装置の専門家だった田中良である。田中は小林一三に依頼され、1923(大正12)年、できたばかりの宝塚で舞台技術関係者を指導しに来た。彼は東京の舞台と宝塚とを掛け持ちしていたが、宝塚に通う日々、合間を縫って岡本にある谷崎の家に行き、『痴人の愛』の挿絵

を描いたのであろうと思われる。ただし決定的な証拠をまだ見つけられずにいる。

『痴人の愛』の連載は1924（大正13）年3月20日に始まり、3月28日にはナオミと譲治の家が描かれている。田中良は、このころ宝塚で仕事をしている。この時期の一致を考えると、田中良が谷崎の家を訪れている可能性は十分ある。

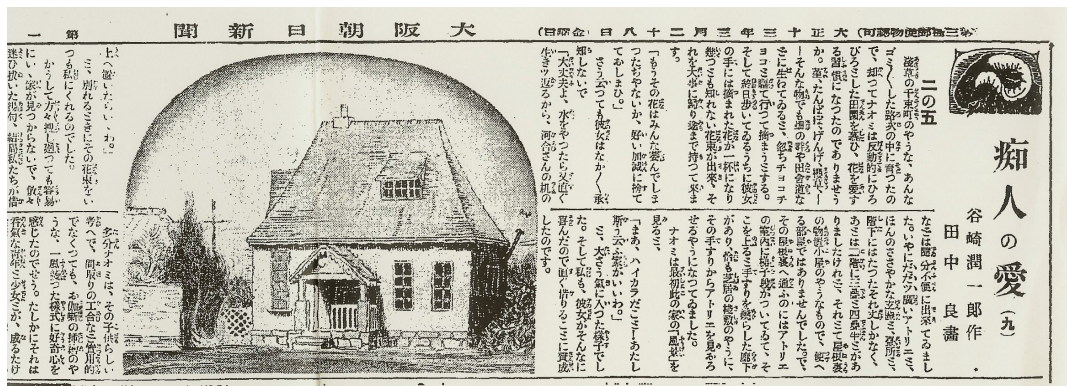


図3 田中良の挿絵の入った掲載分〈B〉



図4 大正15年のナオミの家〈C〉



図5 平成18年解体前のナオミの家

以下は潤一郎の末弟・谷崎修平『懐かしき人々』からの抜粋であるが、家の描写に着目したい。

これは小学校の隣で、石垣に囲んだ道路より高い処にモルタル塗の四角の地所に「品」という字の右側の口がない様な、真中にコンクリートの道があって左側と突当たりの小さな二間と三間の洋室に導かれる。〈C〉

これらの実態から、『痴人の愛』に描かれた譲治とナオミの家〈A〉は、谷崎が実際に書斎として住んでいた〈C〉の家をモデルとし、その家を実際に見て、挿絵画家・田中良は挿絵〈B〉を描いた、と断言してもよいと思われる。

ところで谷崎が住んでいた〈C〉は一体いかなる間取りだったのか。場所も外見もわかって

いながら、なかなか実証できず、隔靴搔痒の思いだったが2006（平成18）年12月、念願かなって中に入り現地踏査することができた。その結果〈A〉は〈C〉をモデルにした、という持論が裏書きされた²⁾。

③ 鎖瀾閣

京都の潺湲亭ほどではないが豪邸であった。谷崎は阪神間で13回も転居したが、自ら建てた家はこの1軒だけである。非常に変わった家であった。

屋根のそりは中国風、そして中の様子はまるで寺院のお堂のような感じで、観音開きの扉を開けると、玄関は石畳になっていた。次の居間との間に卍模様のガラスと棧がはいつていて、ここを開けると、広い中国風の居間がある。筆者が見たときは白壁であったが、谷崎が住んでいた当時はピンク色であったらしい。廊下には階段があり、その隣の間の奥には隠し階段がある。この隠し階段はしばらく発見されなかった、という。この階段は2階書斎の押入れにつながり、押入れを閉めると階段のありかがわからなかったからだ。廊下に階段があるのにもかかわらず、わざわざ隠し階段を作った理由は何か。隣の母屋には妻子が居住しており、谷崎は書斎にこもって執筆していた。書斎に内緒で引き入れていた誰かを逃がしたのか。鎖瀾閣の命名の由来にした『鶴唳（かくれい）』という小説では、母屋に妻子を置いて、自分は「鎖瀾閣」という楼閣に、中国から連れて来た愛人ともりきりになる。かつて描いた夢の「箱」を数年経って建築したのだ。

2階の書斎は完全な和室であり、床の間があってその隣には無双窓。縦に割った竹を合わせてブラインドの役割をしている。隣の部屋には1間半の広い襖があり、襖をあけると、南の窓の向こうに海がみえる部屋がある。はるかかなた、左手に紀州の沖、右手に淡路島が見える。眺望の大好きだった谷崎会心のロケーションである。網代天井がある2階の西側の廊下に出る。岡本は江戸時代から梅の名所であり、どこでも梅が見えた。したがってこの廊下の西側の広い観音開きの窓は梅を見るためのものだったはずだ。まさに梅見の廊下である。風呂は完全な洋風であったらしい。となると1階が中国風、2階が和風、風呂は洋風ということになり、和洋中の美意識が混然一体となった実に不思議な家だった。

しかしこの家は、1995（平成7）年1月17日、阪神大震災で全壊した。柱が少なくガラスが多かったのと、この下が活断層のためであった。地震直後に見た時、復元はできないだろうと絶望した。そんなとき、近年この家の門を作った棟梁が、自分なら復元できるといった。棟梁は1度鎖瀾閣に入ったことがあり、ディテイルに至るまですべて頭に入っている、というのだ。これは技術的に可能だということだ、と理解した筆者はにわかには復元の希望を抱いた。幸運なことに、震災の前年現地に連れていった学生がたまたま自分のノートに間取りを書いていた。そして澤良雄という古建築の専門家に頼んで、多くの写真とこの間取り図をベースにして、設計図を作ってもらった。

谷崎潤一郎は1918（大正7）年の10月から12月まで朝鮮半島から中国に旅行に行った。その時に朝鮮半島と中国の建物を見てきている。帰ってから、地元の山崎米市という棟梁

に細部にわたって説明し、その通りに造らせた。これはまともな建築家なら造るはずのない危険な家だという。なぜなら前面がガラスのため地震がくれば全部崩れるからだ。山崎米市は、大工としての配慮や建築的な常識はさておいて、谷崎の要求通りに造ったため気に入られ、好きな競馬に行かせてもらったりした、と遺族から聞いた。



図6 鎖瀾閣



図7 全壊した鎖瀾閣

鎖瀾閣を復元しようと思いついた際、元の土地は個人の持ち物であったため、他の土地を探し始めた。そして1995（平成7）年9月、当時の神戸市長の笹山氏から提案された。「神戸市が拡張予定地として岡本梅林公園隣接地を買っているのでここを使用してはどうか」と。6軒ほどあった家を立ち退かせた土地があったのだ。この提案された土地に建てるべく14年運動を続けた。14年間の活動の中、12年間は資金が集まらず苦戦した。

しかし2006年に、ナオミの家が家主の都合でつぶされると知り、公開したところ「ナオミの家をつぶすのはもったいない。材木を全部私に下さい。必ずどこかに移築するから」という人が3人も出てきた。この中で1番実現しそうであったのが伊丹の建築業者・則岡宏牟氏であった。彼は200年前の古建築の木材をもらい再建するという活動をずっと続けてきたという。移築場所をどうするかと聞いたときに「伊丹、もしくは故郷の和歌山にする」と彼は言う。筆者は則岡氏に頼んだ。「伊丹は阪神間ではない。和歌山なんてもってのほかだ。谷崎は阪神間を愛した人なのでどうしても阪神間に建ててほしい」と。彼は夢を理解できる男だった。「わかりました、岡本あたりで建てましょう」と承諾してくれた。

ひらめきに任せ、まっすぐその足で神戸市役所の公園課にいき、「鎖瀾閣の設置場所の横にナオミの家を建てていいでしょうか」と聞いた。鎖瀾閣は鑑賞用、ナオミの家は管理棟の機能を持たせるのだ。しかし公園法というものがあり、全体の200分の1でしか設置許可はでない。当時の役人はわがことのように一生懸命になってくれ、計算してくれ、なんとか条件をクリアできることがわかると拍手してくれた。

そのまま伊丹に行き則岡氏に再び会い「土地は提供します。土地を確保する資金を鎖瀾閣復元に回してもらえないか」と交渉した。彼はしばらく考え、条件を出してきた。こちら側で半分の2,800万円出資することである。交渉は成立したものの、この時はまだ寄付金は1,000万円弱しかなかった。それから2年、資金集めに奔走した。源氏物語の講座を開いたり、出資者を増やすための方法を模索して1年で1,000万円が集まった。残りのお金は、兵庫県知事の井戸敏三氏が“ナオミの家～「箱」～”を文化財指定にして残すために500万円出すとってくれた。そして今度は大正銀行がナオミの家の復元に対して500万円寄付する、と申し出てきた。大正銀行が設立された年、1921（大正10）年にナオミの家が建てられているのと、大正銀行の創立80周年記念というのが、出資の理由だった。これで3,000万円近い資金が用意できる算段がついた。条件がクリアできたのだ。

この段階では、われわれ復元運動の仲間たちは、資金さえこちらで用意できれば神戸市が建ててくれると思っていた。しかしこれが間違いであった。建築物を公園内に建てるのは、あくまで我々であり、そのためには「設置許可申請」というのを神戸市に提出しなければならない、というのだ。しかも資金を用意していた2年の間に担当役人が変わった。この人事異動のせいで、風向きが一気に逆風へと変わる。役人の言い分はこうだ。

1. 街区公園は半径250メートルの人が利用する公園である。したがって半径250メートルの圏内に住む住人に了承をとらねばならない。
2. 役所は設置許可を出す立場である。だから整地はするが建物は建てない。
3. 設置許可を出すためには周辺住人の合意が必要である。

われわれは地元で合計9回の説明会を開いた。当初は猛反対にあった。周辺住人の反対の理由はさまざまだった。

1. 上から見下ろされるのは嫌。たくさんの人が来てのぞかれるのが嫌。
2. この土地はずっと公園というから北側の家を買ったのだ。谷崎の家が復元され、見物客が来ると住宅環境が破壊される。
3. 運営上の計画も信用できない。

これらが主な理由であった。われわれは住民の説得のために、いろいろな提案をした。

まず鎖瀾閣が完成するといかほどの圧迫感になるかポールをたて、その上で建物と地盤を含め1メートル下げる提案もした。しかし、それでも不満を唱えられ、ついに地盤も含めて2メートル50センチ下げることにした。地盤を1メートル下げるために1,000万円かかる。退職金をつぎ込むしかない、と本気で考えていた。運営に関しては、甲南大学が学生の教育に使う、ということで資金援助の申し出があった。ほぼ8カ月会議を開いて、周

辺住民の大半はわれわれの妥協案を飲んでくれた。だが1階からの眺望を確保したい北側の1軒が絶対反対だ、という。その家を含め最終的に2軒の強い反対派が残った。

神戸市は平行線の話し合いを打ち切ることを提案した。そして2009年7月、神戸市が最終宿題として3つの課題を挙げた。

1. 隣接17軒の住人の署名捺印
2. 6団体の署名捺印
3. 半径250メートルに住む1,500軒に説明会を開く。

これらがクリアできたら設置許可を出せるという。その宿題をこなすべく、まず17軒中15軒の署名をもらえた。8割とれたらいいとの条件だったので、これは解決した。6団体のうち5団体の捺印をもらえた。当然8割クリア。最後に1,500軒全部に説明会の案内を撒いた。そして7月13日の最終説明会で8割が賛同の拍手をした。だがその夜から、反対派は署名運動を始めた。翌日反対署名が50件提出され、賛成だった婦人団体の1つが反対派に回った。そうこうするうちに反対署名50件が150件になり神戸市が無視できなくなる。われわれの同志の中には、賛成署名を取りに行き対抗しよう、との意見もあった。

しかし私は鎖瀾閣の復元運動を断念することにした。文化をめぐって、地元が真っ二つに分かれ、争うことを憂えたからだ。地元に住んでいない私にはそんな闘争を巻き起こす権利はない、と思った。苦渋の決断、断腸の思いの悔しさだった。

4. 文化を残す立場からの「大義」VS個人の「幸せ」

谷崎は自分の作品のイメージをかきたてるために、引越しをした。この鎖瀾閣は『蓼喰ふ蟲』を執筆した家でもあり、卍模様があったように『卍』も執筆した。中国的な意匠に執着があったと思われる。東京時代は洋風、1918（大正7）年に中国に行き中国風にかぶれ、阪神間に住み始めるや和風になる。松子夫人や文楽との出会いも大きく影響を与えた。『蓼喰ふ蟲』執筆時は3つの文化の間で迷っていた時期でもある。『蓼喰ふ蟲』は主人公・要の美意識が洋風から和風へ移る、という作品である。しかし作品を読まなくともこの鎖瀾閣を訪れると、そのことが体感できた。もちろん作品を読み、この家に入るとすべてが腑に落ちた。だからどうしても後世に残したかった。しかし住民感情は別のところにあった。

「これが200メートル先の話であつたら賛成です。でも目の前だから反対です」

「子どもをナオミの家につれていったとき『痴人の愛』をなんて説明すればいいのか戸惑う。だから私は反対です」

21世紀は個人の時代だといわれる。大義名分の文化遺産や遺跡よりも個人が重い。隣接住民の1人で、30年以上、原子力発電所の地元説明に奔走する仕事をしてきた人が言った。

「最初は皆反対する。しかし礼を尽くし、義を通して話し合ううちに、こちらの言い分を理解してくれ、最後には妥協してくれたものです。こんなことは初めてです。先生、

大変やね」

今回の鎖瀾閣の件は氷山の一角なのだろう。100 年後よりも今が大事という人がこれからどんどん増えてくる。文化財とか文化遺産とかは「個人」の声に押しつぶされていくのかと思った。



図 8 チラシ

鎖瀾閣復元のために皆様が寄せて下さった寄付金は、アンケートを取り、2010 年末までに希望する人全員に返済する。そのまま使って下さい、という人や、1 万円以下の名前がわからない人たちの寄付金のうち、450 万円を使って DVD『鎖瀾閣復元運動の軌跡 大義の引き際～阪神間地区文化の復権への問題提起～』を制作した。私たちの成功と失敗の歴史を後世に伝えるためである。

行政はもはや文化的「箱」を作れないだろう。民間の手で文化遺産や箱ものを残すためには、運動の最初から近隣住民たちと足並みをそろえなければいけない時代になった。

民間が民間の意識で文化的な「箱」を次世代に残すためには、全体に合意をとらなければ

